第１７８号

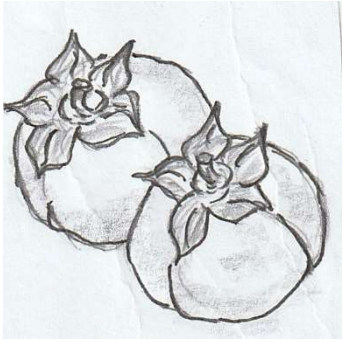
芥川だより

発行日＊２０２１年１１月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
印刷・発行 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

話すことによって力を得る



振り返って考えると、人の話を聞くことばかりで自分の意見を自由に言える機会は少なかったように思う。学校では先生の話を聞き、テレビでは一方通行で見聞きする。「沈黙は金」などと黙っているのが美徳のように言われ、何かを言おうものなら変人扱いされかねない。たとえ自由に意見を言ってもいいといわれても、その場の空気を読んでそれなりの事を言わないと話を聞いてもらえないどころか、バカな奴とレッテルを貼られる始末である。

「声なき声を聞く…」などと書かれた選挙ポスターをよく見かける、これに似たような言葉を政治家は常套句のように使うが、素朴にどのようにして聞くのか不思議に思う。声に出して言うか、文字に書いて自分の意見を表すなど本人の意思表示がない事を良いことにして白紙委任状を受け取ったかのような勝手な解釈で政治家が振る舞うのを見て唖然とする。

何ゆえに自由に話す機会が少ないのか、親しい仲間内でさえその場の空気を読みながら話をする。ましてや会社などでは自分の本音などは棚上げし会社への忠誠心を表現する。家族内でも自由にモノが言えるとは限らない。気配りばかりをして話をしていたら自分の意見を言えないどころか、自分と向き合って考える事をしなくなる。いわゆる指示待ち人間、端的に言えばロボット化する。

氏名、経歴などの自己紹介を一切やめて好きなことを好きなだけ話す機会が増えれば、自分は元気をもらい変わっていくのではないかと想像する。一切のしがらみを解放し本音で話す、間違っていても良い、偏った意見でもよい。思いのまま話す。聞くことから話すことへのチェンジで自分を解放し新たな力を得る。話すことは、いろいろな効用がある。自分が言った言葉を、後で思い返し考え直したり、悩んだりしながら新たな考えを思いつく。もちろん「あんなことを言わなかったらよかった」と後悔することも含めて話すことから全てが始まるのではないか。

死をめぐるあれやこれ（８４）

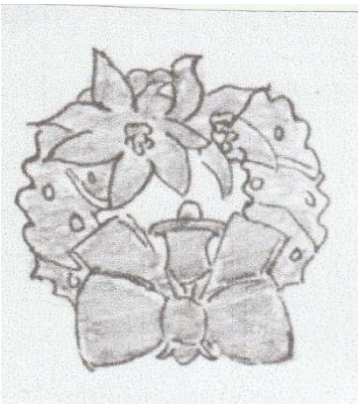
石川　吾郎

衆院選の勝者の内実

今般の衆院選挙の結果にはがっかりした。自民は減らしたものの過半数は上回り、これまで通りの自公政権は続く。野党共闘で選挙協力をした立憲・共産はともに当選数を減らした。国政では「よ党でもや党でもないゆ党」だと言われる維新は四倍に伸ばした。だがこの事実には、こんな軽口で表現しきれない深刻な問題を含んでいる。◆改革を叫ぶ維新は、保守のポーズをとっているが、実のところこの国を徹底した新自由主義の国に作り替えようとする政策を主張している。曰く、経費削減、無駄遣いの削減、「身を切る改革」。このことが何を意味しているのか、外資規制のない規制緩和、自由化、民営化、さまざまなコストカット、国有財産の売却など。◆これらの政策は、小さな政府を追求するもので、公務員の削減、福祉や公共投資・公共事業は削減。そして外資を含めた民間の参入を進める。利益を最大化しようとする企業に公共事業を丸投する。結果、特定の企業のみに利益をもたらす。そして住民サービスの質は低下して、文化的な事業などは切り捨てられていく。大阪市や府ではすでにこれらの政策はかなり進行している。公務員は削減され、窓口業務などはすでにパソナに委託されている。保健所や公立病院の統合などにより、医療体制が弱体化しコロナ感染者数が人口で三倍以上の東京より多く日本一で

あり、医療崩壊したことは印象に深い。

◆こういった緊縮財政と新自由主義の推進は、世界の各国で格差が拡大し、一般の市民層の生活を貧困に陥れるということが明らかになり、世界的に反省の時代を迎えている。自民党の総裁選でさえ、これまでの新自由主義とは違う「新しい資本主義」を唱えて岸田氏が当選を果たした。岸田氏は当選後には早速スローガンを骨抜きにしてしまい、これが実現される可能性はほぼないが、維新の党は新自由主義的な政策を正面に掲げて、躍進をしている。維新に投票することは、住民にとって自分の首を締めるのに等しい行為なのだ。この不思議の原因は、多くの論者が指摘する通り、在阪のテレビ局が繰り返し維新の首長を登場させ宣伝に加担していることが大きい。テレビはいっそ見ないほうがいい。なお今回の選挙で改憲勢力が三分の二を超えたことも、肝に命じておく必要がある。



芥川だより一七八号　目次

		ページ
巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム 84	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 92	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談 42	祖蔵哲	3
大峰奥駆道 48	下村嘉明	5
新型コロナウイルス愚考（19）	明石幸次郎	6
オクラの山たより 62	因了生	7
隠された歴史 37	満田正賢	10
道をゆく 31	成瀬和之	13
マルクスから学ぶ（9）	成瀬和之	14
俳句	土田裕	15
	影山武司	15
編集後記	SK生	15
ふみの道草 41	山椒魚	16

素老人☆よもだ帳（９２）

坂本　一光

◆桜また咲けばモリカケ食べますか

今は秋だが、山笑うように笑うこともできず、幾分かは自嘲を込めて標記の歌を詠んだ。四年ぶりの総選挙投票日の明けた、十一月一日のことである。

それにしても私たちは、サクラの下でまたモリカケを食わされるのか。私たちと言っても「私は、君の言う私たちに入らない」と言う人が大勢いることは承知の上で、なおそれにしても、と言う。原発と言いコロナと言い気候変動と言い、何から何まで安全の神話が水に流されても、戦せぬ国が神話になりかねない事態になっても、明日は明日の風が吹くといつまで思い続けることができるのか。私たちはそれほどお人好しなのか。そんなことを一瞬であるが思った。

一瞬そう思ったが、私の心は変わらない。この十年来、以下のとおり飽きもせずに変わらぬ心をうたい続けている。それを記すまえに、今回の総選挙の前に思い出した歌があった。それを三十一文字にすれば、

「革新の大義に生きむ身の構え」
野党合意によみがえる歌

となる。思い出したのは、黒田草舟の歌、

革新の大義に生きむ身の構え
私心なければ揺らぐことなし

である。草舟とは、黒田了一の雅号。氏は、大阪市立大学教授から転身、一九七一年から2期大阪府知事を務めた憲法学者である。2期目は共産党の単独推薦であったが圧勝している。

「私のことをアカだアカだという人がおりますが、私はまっことクロだです」知事在任中にもそう断言し、憲法改悪に反対して、「ポストの数ほど保育所を」、「十五の春を泣かせない」と、府民第一の政治を推し進めた人である。こういう人が大学にいた、いやいや今ならとりわけ大阪にいたという事実は、これからもこの国の希望であるだろう。「革新の大義に生きる身の構え」を崩してはならないと、私は毎日、草舟のこの歌の色紙を見上げている。総選挙の結果もまた、それを語っている。

さて十年来、私の心はどう変わらなかったか。歌で振り返ってみた。先ずは五七五。

迎え火をゆらす時代の風を読む
安全の神話が水に流される
戦せぬ国が神話になりかねぬ
戦争は徐々に近づきあっと来る
息子夫父まで鬼にする戦
帰れないふるさとづくり再稼働
水ぬるむ水の怒りの解けぬまま
安らかに眠れと言うか核の傘
臆病で弱虫でいい平和主義
大地水空気のごとく平和あれ
この胸の誇り戦を知らぬこと
ヘイタイもコメもデンキも出して過疎
戦争を語れば平和語られる

戦せぬ国に桜も梅も咲く
桜舞うまた来年と言う平和
幸せの足し算ばかり母のふみ
温暖化一度で空の底が抜け
政権を投げた男のコントロール
もっと右もっと右へと国の舵
音もなく戦の前になる気配
核の傘被爆の国が雨宿り
考える葦も悪魔になる戦
フクシマも辺野古もボクの国のこと
沖縄は怒りを水に流さない
渋々も心ならずももうご免
一滴の戦死の涙ない戦後
汝の敵愛する前につくらない
九条があれば平和がありふれる
八月のあの青空にある答え
花は咲く人は平和を思うもの
八月の遠くて近い鶴彬
以上、五七五。以下は五七五七七である。
憲法九条かたちは心であり
心はかたちになるというまこと
二億年銀杏は銀杏

戦せぬ国のかたちはまだ七十年
極微なる水がつながり海鳴ると
確かに聴きしシールズの声
美しい国の言葉に老老の
枕詞が一つ加わり
公文書廃棄改ざんウソ隠へいに
天網恢恢疎から漏るメモ
誰が空ぞ　こは誰が海ぞ誰が土地ぞ
辺野古・普天間われらがものぞ
何もかも水に流せば楽だけど
我が身あらかた水なれば止す
啄木の歌は百年越えてなお
我は私と私に届く
ここにあるどんな不思議に増してなお
水が命を包む不可思議
ふるさとの神も仏も溶けている
墓標のごとき汚染水タンク
フクシマの核汚染水辺野古の海
怒りの水の沸騰止まず
方円の器に従うという水に
憧れていて角は取らない
憲法を暮らしの中に生かそうと
「ひとり九条の会」を始めぬ
鋼鉄はいかに鍛えられたか
島ぐるみ辺野古にノーの声は止まない

九条は退かざるもの
凛として国のかたちの真ん中に立つ
春一斉抵抗の芽が吹き出すと
蟹工船のラストの予感
ひとたびの宇宙の歴史
人類の歴史を我もひとたび生きる

政権交代をめざす市民と野党の共闘は始まったばかりである。モリカケ・サクラに破廉恥な側面を象徴する政治にとって、やがて恐るべき結果がもたらされる日はそう遠くないだろう。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

哲学爺いの時事放談（４２）

祖蔵　哲

もう、二年近くもこのコラムの冒頭は新型コロナのニュースから始まっている。今月も同じだ。専門家の見解では３年は続くという意見が多い。しかしその流行はさながら波の如く押したり返したりである。６月下旬頃から続いていた過去最大の第五波は、８月をピークに急減している。その原因が何かは感染防止対策を考えるうえで非常に重要なのであるが、専門家の中でもはっきりしない。これがウイルスという見えざる敵と戦っている状況であろう。あるときは最強に見え、ある時は衰退として見える。心理作戦を仕掛けられているようでもある。その新型コロナ過去最大の第五波の要因は変異株デルタ型の登場とみられている。感染力が強く、若者層にも広がった。それがなぜ減少に転じたのかは今のところ三つの原因が考えられている。一つ目が「ワクチン接種率の拡大」。二つ目が「行動変容」。従来、若者には比較的感染しにくいとされていたのがこの層にも感染しやすい型に変異した。最も行動範囲の広いこの層が感染機会を減らす行動変化をしたためとみられる。最後には「ウイルス自壊説」あるいは「ウイルス弱毒化説」。しかし、世界では再び感染者が増加傾向にある国も出ているのでこれは楽観的な見方であろう。とりあえず次の第六波に備えるというのが賢明である。しかし、爺いはもちろん専門家ではないのだが、過去の日本でのピークいわゆる「波」を見てみると何かがわかってくるように思う。第一波のピークは新型コロナが本格的に現れた去年２０２０年の５月。そして第二波は８月。第三波は今年１月、第四波５月、そして第五波は８月である。いずれも１、５、８月が最大の月となっている。「お正月」「ゴールデンウイーク」「お盆の帰省」。誰が考えてもこれは「人流」が拡大の要因であろう。そしてまた、そ

の拡大の「原因」と「要因」は区別されなければならない。先の３つのうち原因はウイルス自体の問題、つまりその固有の感染力のことだけである。この原因を除去するための「方法」が「ワクチン」であり、「行動対応」は防止手段である。ウイルスがどれほど強力になったところでそれと接触しなければ感染することはない。これは世界の軍事競争にも当てはまる。ある国がいくら強力な武器を備えても、その国と同じ場で接触し競わなければ何も問題はない。つまり紛争回避の方法は様々にあるということである。

（1）経済優先全体主義と自己責任論

さて、そうは言っても、黙ってウイルスが自滅するのを待っていられないのが常に「経済成長」を目指す世界である。そのためにウイルスと戦う武器の配備は必須となる。それが「ワクチン接種」である。「七十％の壁」という言葉があるらしい。七十％以上の接種率で集団免疫ができるという。そのために各国は接種率の向上に躍起になっている。G20 サミットで各国首脳は途上国で遅れている新型コロナウイルスのワクチン接種について、供給を加速して２０２２年半ばまでに世界人口の七十％への接種を目指すことを確認している。ワクチン接種に関しては早期の認可によりどのような副作用があるかは明確になっていない。にもかかわらず「利益がリスクを上回る」という理屈で最近では低年齢層への接種も推奨されるに至っている。

様々な統計によって若干違いがあるが概ね、接種率一位はスペイン７９％、以下中国、カナダ、イタリアまでが７０％以上で日本は世界八位の６５％である。各国は接種率を向上させるための様々な策を行っている。最も成功しているイタリアはいち早く「グリーンパス」と呼ばれるワクチンの接種や検査による陰性結果を記録した証明書の所持を義務づけている。しかし、接種率が５５％と低いアメリカはその義務づけのために様々な弊害をあたえている。

例えば、米ユナイテッド航空はワクチン接種拒んだ社員６００人を解雇にしている。その影響で航空機の運航にも影響を出している。さらに市民生活に影響がでているのが、アメリカ ニューヨークでの市職員の強制休職問題である。新型コロナウイルスのワクチンを一度も接種していない市の職員、約 9000 人が休職扱いとなっており、市街のゴミ回収が長期間行えなくなり放置されているという。ここまでくると社会の強制義務化が個人の自由と対立し、問題が「社会対個人」「多数対少数」という対立問題になる。この構図からは社会と個人との分断が起こり「個人の自由」は「社会」から切り離され「自己責任論」が出てくる。つまり、これが極端化されれば「ワクチン証明」のない人は公的治療が受けられないという「差別」である。国家の命令に従わなくて不利益を被った場合はすべて自己の責任というあの「自己責任論」という経済優先の全体主義である。

（2）「新自由主義」から「新しい資本主義」へ

さらに「差別」は拡大する可能性がある。それは「経済優先」という「資本主義の成長ルール」の宿命でもあるが。資本主義の象徴であるアメリカは２０２０年3月コロナウイルスに汚染され「国家非常事態宣言」を出した。そして中央銀行にあたるＦＲＢが緊急会合を開き、ゼロ金利と量的緩和の導入を決めた。あれから一年半余り。ＦＲＢは、この危機対応の縮小を決めようとしている。量的緩和で買い取る国債などの「量」を段階的に減らし、半年程度をかけて政策そのものを終了させる方針である。その結果、コロナ対策費用も縮小される。その理由はアメリカ議会対策である。同国は日本と異なり「プライマリーバランス」つまり「国家財政均衡」を保つことを争点にしている。そのせいで国家支出を制限し、経済市場に資本主義の自由を復活させ「成長」を促そうとしている。しかし、日本では名目上は財政均衡を図るといいながら、国家はお札を刷り続けている。その結末は官製バブルである。将来が見えない国民は支出を控える一方、金余りの富裕層に資金が流れ株式市場は実態を反映しない「博打場」となっている。しかも「一億円の壁」といわれる「株式利益」優遇税制によって「格差」はますます拡大していっている。国家財政の赤字の付けは、いつまでたっても給料な上がらない低所得者や将来の世代にまわされている。これは異常な資本主義である。本来なら革命が起こりそうな様相であるが、冷戦終了後すっかり飼いならされてきた国民は「ソ連」「中国」の共産主義よりはといって資本主義批判には向かわなくなっているさて、そんな弱腰の国民に代わって日本で「資本主義批判」をやりだしているのが驚くなかれ政権政党である。これも茶番劇の続きであろうが。

自己の政治責任を新型コロナによるものと偽装して政権責任を放棄した安部、菅首相に引き続き、党内選挙という茶番劇により首相指名を受けた新政権は奇襲を仕掛けてきた。それが「新しい資本主義」である。もとより「規制緩和」や「小さい政府」を標目する「新自由主義」は１９８２年中曽根政権以来続いてきていた。しかしその後、日本では景気後退に陥り長期にわたり経済成長が停滞し今に至っている。現政権が目指す「新しい資本主義」とはこの「新自由主義」の改訂か、それとも別のものかまだ明確でない。

新首相は10月26日、かねてより唱えていた「成長と分配の好循環」の実現に向けて設置した「新しい資本主義実現会議」の初会合を開き、科学技術立国の推

進や経済安全保障の強化など、最優先で取り組む課題について、十一月上旬にも緊急提言案を取りまとめるよう指示した。しかし、「分配をする」を先の衆議院選挙戦のなかでは言わなくなってしまった。その理由が、野党から「分配なくして成長なし」と言われてしまうからだと。しかしだからと言って、「成長なくして分配なしです」と言うとアベノミクスと同じになってしまう。アベノミクスは典型的な「トリクルダウン理論」を基にした経済政策である。「トリクルダウン」という表現は「徐々にあふれ落ちる」という意味で、大企業や富裕層の支援政策を行うこが経済活動を活性化させることになり、富が低所得層に向かって徐々に流れ落ち、国民全体の利益となる」とする仮説である。結婚披露宴などでグラスをピラミッド形に組みおいて頂上からワインを満たして順に下まで伝い落ちるというイメージである。これは、古典的経済理論である、現実には起こりえないが、一般に想像しやすいため現在でも信じている人が多数である。

さて、この「新しい資本主義」に「経済成長」は入るが「規制緩和」は入らないという。従来の資本主義であればこの「規制緩和」が自由主義市場に「成長産業神話」を作り出す余地を残していたのだがそれができないようにあえてそうした。そこには国際的な資本主義経済の変化の影響がある。それが「ＳＤＧｓ」だ。

（３）「資本主義」の舵切り「ＳＤＧｓバブル」

ＳＤＧｓ「持続可能な開発目標」とは、「将来の世代の欲求を満たしつつ、現在の世代の欲求も満足させるような開発」をおこない、人間にとって理想的な社会を目指すことだとされている。将来世代とは今どこにいて、だれで、どのような要求内容かもわからないはずなのに勝手に想定しているが。ことの起こりは、２０１５年９月、ニューヨークの国連本部で開催された持続可能な開発サミットである。もとは第二次世界大戦後に勃発した「経済対策と環境対策の対立」がルーツで、１９７２年の国連人間環境会議「人間環境宣言」、１９９２年の環境と開発に関する「リオ宣言」に続く、「資本主義の成長の限界問題」が根底にある。そもそも「資本主義」はマルクスが資本論で説明するまでもなく「人間と環境」からの搾取で成立している経済システムである。１９９０年以降、世界の冷戦構造が終焉し、資本主義はその敵をなくして以来、本来の自己の矛盾に直面することになった。それが、「人間と環境」である。「人間」の搾取問題は「国内格差の固定化」や「未開発辺境国の消失」によってその矛盾が目立たなくなったが、「環境」の方は「気候変動」「環境汚染」などでその実態が顕著に現れており危機感が増幅されている。しかしＳＤＧｓの１７の達成目標ではこの「環境の問題」だけでなく「人間の問題」が掲げられている。「貧困、飢餓」などの撲滅から「福祉、教育」などの社会制度、さらに「平和、平等、働き甲斐」などの理念までも含む。これは資本主義という経済制度の枠内ではなく、人間存在の理念に近いものである。それほど人間も含む地球環境、自然が危機に直面してきているということかもしれない。

しかし、このような崇高な理念とは裏腹にやはり「資本主義」の生き残りをかけた執念は、この理念さえも「ビジネスチャンスの拡大」ととらえており、ここから自分たちに有利な利益を誘導しようと考えている。人間の生死の問題にさえ、それを自分の利益とするような「悪魔の商人」であるかのようだ。その具体的展望は、国が支援するために「資金調達を有利に進められる」、そして共通理念にかかわっているというイメージアップにより「企業組織の強化」「企業価値を高める」などの人材集め、宣伝効果などの有利性である。マルクスが分析しているように、資本主義は基本的にバブルを起こすのが宿命である。「資本論」ではそのバブルが恐慌になり資本主義が崩壊し次の共産主義に移行するとある。これが「史的唯物論」と呼ばれるマルクスの歴史法則である。しかし、実際にはそうはならない。なぜなら、その前に地球の自然環境が破壊され人類が滅ぶからである。このことにマルクスは気が付いていたのであろうか。

「ＭＥＧＡ」というマルクス・エンゲルス全集の国際プロジェクトが最近、マルクスの未発見の論文の公開に乗り出しているという。そこでは、まさに「地球環境」という視点からの「資本論」が研究されている。これによって従来の「資本論」がどう変わるのか。次回はこの視点から「新しい資本論の哲学」を展開したい。

大峯奥駈道（４８）

下村　嘉明

困ったときの神頼み、とはよく言ったもので、どうしようもない時に何かにすがりたい気持ちを神や仏に向け頼み込む。昔、亡き母は何事につけ村の神社にお願いしに行ったものだ。家族が病気になった時や父の酒乱で困り果てた時も、毎日のように拝みに行っていた。私も、試験の時などは、朝早く独りで行って真剣にお願いした。

そんな経験があるので、婆さんの病状が一段と悪くなり、食事の時に口を開けさすのが難しく意識もうつろな感じにな

って困り果てた時に考えたのが、婆さんの先祖が眠る金沢の墓参りだった。家内と娘を説き伏せ車を走らせた。ついでに最近亡くなった婆さんの弟さんの墓も何とか探して墓参りをした。豊中インターから往復１０時間ぐらいの運転を私がしたが意外と疲れず、無事に帰れた。

次の日の夕方、ショート・ステイから帰ってきた婆さんに、食事を与えようとするといつものように目を閉じ眠ろうとするので、「昨日、金沢の墓参りに行ってきたで、弟のチィちゃんの墓も参ってきたで」と話すと、目を開き嬉しそうな表情をし、食事も口を開け予定の量を食べてくれた。そして、１週間ほどは、墓の話で何とか食べさすことが出来たが、また食べなくなった。

それで、私の部屋に飾っていた大峰講で護摩供養をしてもらった大事な龍泉寺のお札を婆さんの所へ持っていき、婆さんに見せたら反応した。「婆ちゃん、有難いお札やで、役行者が修行された龍泉寺のお札やで、役行者が婆ちゃんに力を与えてくれるで」といって、ベッドから見える正面に置いた。不思議なものでそれから二三日は少し元気を取り戻して食事がとれた。それを見ていた家内は、来年も大峰講に行ってお札をもらってきてと言う。

そんなこともあって、家内は熱心に仏壇と龍泉寺のお札に手を合わし、水と果物を備えるようになった。「妙見山も参ったらどうかしら」という始末。これまで神や仏には、あまり関心がなかった家内が婆さんの老衰を目の前にして何としても少しでも長く生きてほしい。奇跡を願う家内の祈りが神や仏さまに少しでも届けばいいなあと私は見ている。

現在のように進んだ医療環境においてもどうすることも出来ないことは多い。ましてや、昔、人々が病など絶望的な状況に追い込まれた時に頼るものは、先祖さまの仏壇や墓、村の鎮守様である神社であった。もちろん、苦しい事ばかりではなく、夢や希望をかなえるためにお参りした。このように人は何かにすがりたい気持ち、願いをかなえてくれる偶像を自ら見出したと思える。

信ずれば救われると聖書にはあるが、何かを信じることによって一瞬でも心が救われることは確かにあるように思う。私は、苦しい時や痛い時は、楽しい事を想像するようにしている。非常に痛いだろうと思う手術でもその瞬間、無理やり楽しいかった事を思い出したり想像したりするようにしてきた。何をどのように信じるかは、各人の自由であるが、何も信じるものが無いのより、何でもいいから信じるものがあったほうがいいように思う。

芥川の知り合いの婆さんは、２５年間毎日、近くのお地蔵様にお参りし掃除や飾りつけをされたと聞いた。たぶん各地で同じような事をされている人は多いと思う。芥川のお地蔵さんの改修工事の時に募金をされたので少額ながら喜んで寄付した。世話役だった人の話では予定より多く金が集まったと聞いた。

世話役の人も大変だが、長年地蔵さんを世話し続けた婆さんは表には出ずじまいだった。世の中、そんなもんだと言えば、そうなのだが、何か割り切れない。すべて人のすることは、良い事と悪い事が半々だ。しかし、信じる力は、見方を変えてこの世をバラ色に見せてくれるように錯覚を人に与えるから不思議だ。

新型コロナウイルス禍愚考（その19）

明石　幸次郎

コロナウイルス感染禍で、日本社会のいろいろな問題が浮き彫りにされました。中でも、もともと脆弱な立場にあった非正規雇用者は今や働いている人の男性が２３％、女性は５６％となっていますが、これらの人達がよりコロナ禍でより厳しい経済状況に追いやられています。それは、日本社会にあった経済格差と若者の中での勝ち組、負け組と言う分断をいっそう拡大させる社会問題となっています。

コロナウイルス感染での経済の落ち込みの補填のために政府は一人当たり１０万円が国民に配られましたが、貧困に喘いでいる人には、多少の息をつなぐ程度の額で、反面、大半の年寄りは消費するよりは預金に回すといった行動をとって、アベノマスクで５００億円使ったのと同様に効果（現金の方がまだ、ましではある）の乏しい、本当に困った人達の救済処置になっていないと批判されています。

コロナで浮き彫りにされた貧困問題の根本的な原因はどこにあるのか？　大きくは、２００１年に小泉内閣が打ち立て竹中平蔵が推進した新自由主義市場経済原理による「聖域なき構造改革」政策から生じたものであると思います。

その政策の一つとして、働き方の多様化と称して、労働者派遣法の規制緩和により製造部門への派遣労働者（非正規社員）を増やし、その結果が正規社員と非正規社員の所得格差を生じさせる原因となってしまいました。それから２０年がたち今や、非正規社員が働く人の４０％近くもなっています。非正規社員は、所得格差によって、経済的ハンデキャップが大きくなり、若い人が結婚も出来ないとか、病気した時、収入の保障がなくなり、たちまち困窮して生活が立ち行かなくなるという不安を抱えたまま暮らすことになります。

正にコロナ禍によって、もろに経済的な影響を受けたのが非正規雇用で働いている人達でした。会社が倒産したり、又、

仕事が減ったために雇用を打ち切られる「派遣切り」で失業したりして、今までも、それが原因で離婚したり、「うつ」になったり、アルコール依存症になったり、希望を無くして引きこもったりして、社会的孤独を深めている人達を数多く生じさせています。これらの人達の最大の犠牲者は２０数年前のバブル崩壊、その後の小泉構造改革などによって、不景気のあおり受けた就職氷河期と称させる世代で（３７歳～４６歳）「ロストジェネレーション」とか「棄民世代」などと呼ばれたりもしています。

当時から、自己責任論が叫ばれ、努力して頑張れば、学歴、富、社会的地位が得られるとして、その象徴的人物としてライブドアのホリエモン、村上ファンドの村上世彰などがマスコミに取り上げられた。又、その半面、別に頑張らなくても、それなりに自由で会社、組織などに拘束されなくても、フリーター、非正規雇用で働けば自分の好きなことができるのだと言う風潮もあり、家庭の事情なり受験勉強に向いていないなどとの理由で、学歴社会から外れた生き方を選択する人達もいました。小泉改革で働き方の選択肢が広まって、自己責任で選択したら自分らしい働き方が選ばれるのが良いという考えた方も広がりました。

その一方では、改革は公共サービス、社会福祉予算などを抑制したため、一度、貧困状態に追い込まれると中々、そこから抜け出せない社会構造になってしまいました。

それは、①教育による構造　親世代が貧困状況にあると、子供の多くは中卒、高校中退と社会で上昇するための、ホリエモン、村上のような東大卒の学歴、知識、人脈、スキルなどを得ていない。「親ガチャ」という言葉を現在は生み出しています。頑張るための環境と条件が揃っていない、日本は学校教育費の公的支出がＯＥＣＤの中では下から２番目です。因みにドイツは大学まで教育費は無料で、全額公的負担。子供手当は一人当たり２５０ユーロ（約３３０００円）を何と２６歳まで支給される。ドイツ在住の愚息の家計は子供２人の手当てで住宅費（１００平米位のアパートメントが８万円足らず）をほぼ賄っている。

②企業社会の構造　正規雇用社員には、会社の雇用保険、社会保険。福利厚生（社宅、家賃補助、家族手当、通勤交通費、社員食堂など）雇用の安定のため、生活の不安感がなくなる。非正規社員、派遣社員にはこの構造から排除されています。雇用不安から将来への生活不安感を抱いている。私が６０歳から勤めた後輩の会社での派遣社員の時給は、ほぼ１２００円でした。そこから派遣会社が管理費と称して約２０％から２５％を取ります（法的に認められている）月25日、一日８時間働いても手取り２０万円足らずでした。

③家族、親族の構造　日本のような低負担、低福祉社会は、自助、共助、共助などのサポートを政府は強調するが、貧困状態に陥る人は元々、頼れる家族、親族がいなく、親族間などの相互扶助のセーフティネットがないのが現状です。

④公助の構造　生活保護の制度はありますが、資格があっても門前払いをされて、なかなか受給までたどり着けない。資格があっても受給されていない人は６００万～８５０万人もいると言われています。先進国では日本が人口当たりの生活保護受給者数は最低です。

⑤心理的構造　人に迷惑を掛けてはいけない。人に頼ってはいけない。出来るだけ自分で頑張る。自己責任で困窮しているのは、自分が悪いなどと社会のセーフティネットを頼ろうとしない心理的な状態に陥ってしまっている。

この様な五つの社会的構造の問題が小泉、竹中改革でこの２０年間に大きくなり、コロナ禍で社会をより不安定にしています。その構造を見直し、改めようという動きは、ボランティア活動で出てきても、国が改めようとしていない。又、今回の総選挙で、どの政党もこの社会的構造を変えていこうと公約に唱っている処はありません。

これでは、勝ち組は、ますます豊かになり、負け組は敗者復活戦の土俵にも立てずに社会から排除されてしまいます。しかし状態がこのまま続くと、秋葉原無差別殺人、京都アニメーション放火などの無差別テロ的な事件がこの世代から起きるような予感がします。

我々のような家が貧しくて塾へ行かなくても学校で頑張って勉強、運動して、頑張れば、大学、大企業、教師、公務員に入れた良き時代に生き延びた世代は、このコロナ禍で、苦しんでいる世代に想いを向けて、それぞれの場で色々な形でサポートする責任と義務があるのではないですか？

オクラの山たより（６２）

困了生

一

多くの識者によって指摘されていることですが、蕪村の句を読んでいくと虚構の句が多いことに気づきます。

しかし、ここで一つの問題が生じます。見たまま聞いたままを作者が主観的な整理をほどこした上で再構成して表現する以上、すべての言語表現には多かれ少なかれ虚構（フィクション）が原理的には存在します。とすれば、当然、俳句にも虚構は必ず存在することとなります。芭蕉の門人であった支考が師の言葉にかこつけて偽作したとされている「二十五箇

条」の「虚実の事」の条で

詩歌連俳といふものは上手にうそをつく事也

と述べたように江戸期の俳諧においても、そのことは当然のことでした。

では、蕪村に虚構の句が多いとされるのはどうしてか。それは蕪村の句において表現の対象・素材における虚構が多いということではないかと考えられます。つまり、作者自身の実体験ではない内容をあたかも現実に体験したもののごとく表現した発句が蕪村には多いということです。たとえば次の句です。

① 易水に葱（ねぶか）流るる寒さかな

この句は「史記」の「刺客列伝」に書かれた荊軻の有名な故事に取材しています。易水は今の中国の河北省を流れる川。燕の太子から秦始皇帝の暗殺の依頼を受けた荊軻がこの易水で見送る人に別れを告げて旅立っていきます。もちろん、暗殺に成功しても生きて帰れる可能性はありません。二度と帰ることのない荊軻を見送る人々によって次の歌が歌われました。

風、蕭蕭として易水寒し。
壮士、ひとたび去って復た還らず

①の句で作者が見つめるのは冬の易水をさっと流れていく葱です。そして「易水」という言葉のイメージによって伝えられる荊軻の壮絶な運命です。そう考えると「寒さ」の一語はいっそう重く感じられます。冬の流れに「葱」という簡単明瞭な構図だけにかえって読む人の心に強く世の無常を訴えてきます。

この句は荊軻の故事を材料にした卓抜かつ壮大な句だといえますが、作者の豊かな想像力によって構想されたまったくの虚構の句であることは注目してもいいでしょう。

また、これは芭蕉の「葱白く洗ひたてたる寒さかな」を意識した句ともいわれますが、静的な芭蕉の句と動的な蕪村の句という対比はおもしろい。贅言をそぎ落とし対象をつきつめたともいえる芭蕉の句を意識しながらも悠々たる詠みぶりを示し、動的な句の中から人の悲しみを漂わせているあたりは蕪村的といえるかもしれません。

二

もちろん、蕪村に虚構の句が多い理由は何よりも季題に基づいて詠んだ題詠の句が多いということにあります。与えられた季題の本意・本情をよくよくとらえて、それが最も効果的な情景となるように組立てて表現するのが題詠です。直接事物を見ることなく句を詠むわけですから、虚構を交えた句となっていくのは当然のことです。しかし、蕪村に虚構の句が多い理由はそれだけではありません。一言でいえば彼の豊かな想像力だといえます。

漢詩文だけでなく日本の古典にも精通していた蕪村がもっていた和漢の古典的教養、それが彼の想像力を絶えず刺激し活性化する役割をはたしています。次に示す句からも分かるように、和漢の古典的な教養は蕪村の発句の虚構に対して多くの素材を供給していました。

② 鳥羽殿へ　五六騎いそぐ　野分かな
③ 行く春や　同車の君の　ささめごと
④ 指南車を　胡地に引き去る　霞かな
⑤ 揚州の　津も見えそめて　雲の峰

②の句の鳥羽殿とは平安中期に白河院が洛南鳥羽の地に離宮を造営し、その後、鳥羽院の伝領になってから鎌倉幕府が確立するまで日本史の主要な舞台となった地です。その鳥羽殿へ急ぎ馳せていく五、六騎の武者。何やら世の乱れる不穏な空気が伝わってきます。そこへ野分の強い風の音。馬のひづめの音と重なる馬上の武具の音まで重なって緊迫感をいっそう盛り上げます。保元の乱を描いた「保元物語」の一場面を絵巻物風に詠んだ句とされています。「大きく輪郭を取った構図、具体性を持たせるために『五六騎』という数の指定も見事に描写となって生きている」とは人間探求派の俳人中村草田男の鑑賞です。

③は平安時代の牛車に貴族と同乗する女性とがひそひそ話、睦言をし合う情景。

④の指南車は車上の人形が常に南を指す装置を積んだ車のこと。広漠たる胡地の辺境へと向う遠征軍。その先頭にある指南車も模糊とした深い霞の中に消え去っていったという句意。季語は「霞」で季節は春。「高麗船のよらで過ぎ行く霞かな」と同様に非現実的な幻想を描いた句で春愁の詩情もほんのりと感じられます。

⑤は遣唐使一行が苦難の末に中国江蘇省の都市揚州にたどりついたという空想の句。蕪村が揚州の情景を遣唐使の一行の一員として見たかのように詠んでいるのは見落とせません。

そして、⑤の句に限らず②から⑤の句はすべて作者が自らの目と耳で見聞きしたかのように詠まれている「虚構の句」であることは注目してよいでしょう。

蛇足ですが、②から⑤のいずれの句も鮮明な印象が残る句であるのは蕪村が画家であったことと無縁ではありません。ここで詳しく論ずる余裕はありませんが、そもそも南画の絵師であった蕪村は抽象的なテーマを具体的な絵画に描いていくことにたけていました。

たとえば池大雅と合作した国宝「十便十宜図」のうち「十宜図」は蕪村の作ですが、李笠翁（明末清初の文人李漁のこと）の詩を見事に絵画として表現してい

ます。こうした画家としての日常的な修錬は虚構の句を思い描くとき、彼の豊かな想像力の働きと相まって大きな力を発揮したに違いありません。

三

とはいってもです。蕪村にあっても和漢の古典を題材にした発句すべてを虚構の句だということはできません。

たとえば、次の句です。

⑥ 阿古久曽の 指貫（さしぬき）ふるふ
　落花かな
⑦ しぐるるや 長田が館の 風呂時分
⑧ こほろぎや 相如が弦の 切るる時
⑨ 滝口に 燈（ひ）を呼ぶ声や 春の雨
⑩ 玉あられ 漂母が鍋を 乱れうつ

⑥の句の「阿古久曽（あこくそ）」は紀貫之の童名です。降りしきる落花の道をやってきた秀才少年紀貫之が着ていた指貫についた花びらを大人びた物腰で振り払っているという句意。シュッとした少年貫之の姿を詠んだすきのない句です。

⑦は平治の乱（一一五九年十二月に起きた）で敗れた源頼朝の父である源義朝が東国をさして逃げる途中、尾張国内海（「うつみ」と読み知多半島の先にある）の長田忠致の館で入浴中に惨殺された歴史事実に基づいた句です。

⑧はこおろぎの鳴き声だと思ったが実は司馬相如が琴を弾いている最中に弦が切れる音であったという句意。司馬相如は前漢の時代の文人であり琴の名人であったが零落の日々を送ったことがあり、こおろぎはそのことを指しているか。司馬相如の琴の音に美人で有名であった卓文君が恋をして後に夫婦になったことは有名な逸話です。

⑨の「滝口」は禁中の警護にあたった武士のこと。「明りを！」と宮中のどこからか声がする。物の怪か盗賊か。何事かの事件が宮中で起きた緊迫した状況を表現した句です。

⑩の「玉あられ」は玉のような霰（あられ）のこと。「漂母」は水で古い綿を洗う老女の意で洗濯婆さんのこと。漢の高祖劉邦に使えた武将韓信が若い時に家が貧しくて食べ物にも窮したのを憐れみ、一人の漂母が食事を与えたことに材を取った句です。「乱れ打つ」とは若い韓信に食事を恵み与えた洗濯婆さんの鍋を玉のような霰が音をたてて打つ、という情景です。

注意深く見て行くと⑥から⑨の句は歴史上の人物や事件をそれとして詠んだ、いわゆる「詠史」の句であり、現実の体験ではないものを作者の実体験のように詠むという「虚構」の句とはいえないでしょう。おそらく作者に歴史（伝説）上の事柄を詠むという意識が強くあるために作者と句中の情景との間には一定以上の距離があるようで、そのために客観的な読み方の雰囲気を漂わせているのでしょう。一方、②から⑤の句は作者が主体となっていたり、事件の場に作者自身を居合わせていたりしているために句の情景と作者との間に客観的な距離は感じられません。この点で②から⑤の句は虚構の句であると考えられます。つまり「虚構の句」か「詠史の句」かは句の情景と作者自身の距離の取り方によって決まるといってよいのでしょう。

このことから見ていくと①や⑩の句はこうした距離の取り方が極めてあいまいで虚構・詠史のいずれとも決められない句です。蕪村にあっては虚構・詠史の区別はかなり不確定な要素が多いと見るべきでしょう。

四

蕪村は芭蕉の俳諧を至高のものとしましたが、芭蕉とは異質の作為性の強い俳風にも惹かれていたようです。研究者によれば、これは当時の俳諧中興の機運の中で芭蕉を慕う多くの俳人が「高邁洒落」をよしとするあまりにややもすれば平板な叙景句ばかりが流行するようになった俳壇の状況に蕪村が危機感を抱いたためで、そのためわざと作為性の強い句を詠もうとしたというのです。たとえば次の句です。

⑪ 負くまじき角力（すまひ）を
　寝物語りかな
⑫ 討ちはたす梵論（ぼろ）つれ立ちて
　夏野かな
⑬ お手討ちの夫婦（めおと）なりしを
　更衣（ころもがえ）
⑭ 藤の茶屋あやしき夫婦休みけり
⑮ 宿かせと刀投げ出す 雪吹（ふぶき）かな

⑪の句は、負けるはずのない相手に不覚を取って黒星となった力士が、その夜の寝物語にクドクドと愚痴をこぼし、それを優しく妻が慰めているという句意。ペーソス漂う佳句です。

⑫の句は「徒然草」第一一五段から材を取った句です。「梵論（暮露とも書く）」とは「ぼろぼろ」といい中世の普化宗の虚無僧のことです。相模国の宿河原の道場でめぐり会った「いろをし房」と「しら梵字」とが二人だけで河原に出て「心ゆくまでばかり貫き合ひて、ともに死にけり」という「徒然草」の話を過不足なくまとめた秀句。「討はたす」は「これから決闘する」の意ですが、壮絶な結末をも暗示しています。また、季題の「夏野」は二人の異常な殺気を象徴する背景となっています。吉田兼好が感動した二人の死を十七文字にまとめた作者の非凡な表現力は目をみはるものがあります。

⑬の句は、不義をはたらいて本来ならば主（あるじ）の手によって手討ちとなるはずの男女が主の特別の恩情で助命され、今日卯月の朔日（ついたち）の更衣に、長らえることのできた生命の喜びを二人

して味わっている、という句意です。話せば長くなる話を十七文字で言い切ったところが素晴らしい句です。

⑭の句の「茶屋」は密会の男女に部屋を貸す茶屋のこと。こうした茶屋にやって来る男女は夫婦としては確かに怪しい二人です。

⑮の句は、吹雪の夜に雪まみれになって飛込んできた一人の男が「一夜の宿を」と言うやいなや大小の刀を上がりかまちに投げ出した、という内容。せっぱ詰まった場面にふさわしい急調子の句で蕪村の代表的な句の一つです。

⑪から⑮までの句はいずれも作為性が強く物語性を内に含んだ句です。句の中で語られる物語は十七文字の中には収まりきらず、読者の心に物語の展開への予測と期待が生じさせ、それが余情となって深みを加える独特な雰囲気をかもし出しています。

ただし、⑮は物語性というよりは芝居の一場面であるというべきでしょう。すでに述べたことですが、蕪村の芝居好きは相当なものでした。芝居の一場面を素材にして句を詠むということもしばしばあったようで、こうした環境があったればこそ

浪速を出てより親里までの道行きにて、引き道具の狂言（背景や大道具などに車を付けて移動できるようにして演じられた芝居のこと）、座元（演劇の興行主）夜半亭と御笑ひ下さるべく候。

と蕪村自ら述べる「春風馬堤曲」という芝居仕立ての虚構の俳詩も生み出せ得たのです。

五

人の世のことを詠んだ句には私小説にも似た句がかなりあります。すでに紹介した句ですが、次の句などは好例であるといってよいでしょう。

⑯ 端居して妻子を避くる暑さかな

⑰ 腰抜けの妻うつくしき
　巨燵（こたつ）かな

⑱ 身にしむや亡き妻の櫛（くし）を
　閨（ねや）に踏むかな

⑲ 虫干しや　甥の僧訪なふ東大寺

⑯の句は暑い京都の夏を知る者には共感しうる内容でしょう。⑰の句は家事に疲れてコタツに入ったら寝てしまった妻を「美しい」と見直した句。家庭でのドラマの一コマです。⑱と⑲の句で「亡き妻」「甥の僧」と言っていますが、蕪村の妻ともは夫の死後三十年以上生きており、甥が僧侶になっていたという史料もありません。蕪村が家族のことを材料にして詠んだ句から彼の伝記の傍証とすることは注意しなければならぬことです。

【補足】

本文中で紹介した「玉あられ　漂母が鍋を　乱れうつ」の句について詩人の萩原朔太郎が「郷愁の詩人　与謝蕪村」（1988年刊　岩波文庫）でユニークな解釈をしているので紹介します。文中の（　）は筆者の注です。

「漂母は洗濯婆のことで、韓信が漂浪時代に食を乞うたという、支那の故事から引用している。しかし蕪村一流の技法によって、これを全く自己流の表現に用いている。即ち蕪村は、ここで裏長屋の女房を指しているのである。それを故意に漂母と言ったのは、一つはユーモラスのためであるが、ひとつは暗にその長屋住いで、蕪村が平生世話になってる、隣家の女房を意味するのだろう。

侘びしい路地裏の長屋住い。家々の軒先には、台所のガラクタ道具が並べてある。そこへ霰が降って来たので、隣家の鍋にガラガラ鳴って当るのである。「我を厭ふ（隣家の寒夜に鍋を鳴らす）」の句と共に、蕪村の侘びしい生活環境がよく現れている。ユーモラスであって、しかもどこか悲哀を内包した俳句である。」

「漂母」がいつも世話になっている隣の女房だとしているのはおもしろい。朔太郎は蕪村の住いを江戸の町人が住んでいた共同のトイレと井戸がある間口二間の棟割長屋、いわゆる裏店長屋と同じようなものだと考えていたかもしれません。

隠された歴史（３７）

満田　正賢

前回から、「遣隋使と遣唐使の遣使の主体が異なる」という私の仮説について掘り下げています。通説ではもちろん遣隋使も遣唐使も大和朝廷・近畿王朝がおこなったものと捉えています。一方古田史学では、倭国の遣隋使や遣唐使は九州王朝が行なったことと捉えています。それに対し私の仮説を要約しますと、「倭国（隋書には『俀国』と記されている）の遣隋使は蘇我馬子が行なったことであり、『倭国』の遣唐使は九州王朝が行なったことである。蘇我氏を滅ぼした近畿勢力は九州王朝の配下となり九州王朝の遣唐使に随行した。白村江の敗戦以降始まった『日本国』の遣唐使は九州王朝を引き継いだ近畿王朝が行なったことである。」ということになります。

日本書紀の遣隋使・遣唐使の記述には

おかしな部分があり、古田史学では日本書の隋・唐との交流に関する記述の問題点を洗い出しています。その問題点に対して前回から私なりの回答を述べているのですが、今回はその続きです。

まず、日本書紀の遣唐使の記述が十年～十四年ずれている問題についてです。これに関しては、古田史学の会の服部静尚氏が「日本書紀の中の遣隋使と遣唐使」（古田史学会報１２３号）の中で分析しています。

服部氏は書紀の遣唐使記事を以下に整理しています。

①推古十五年（六〇七年）七月、大礼小野臣妹子を大唐に遣す。

②推古十六年（六〇八年）四月、妹子、裴世清と筑紫に。三〇艘で迎える。九月、裴世清帰国、妹子再遣（高向玄理・僧旻・福因・恵穏・清安ら）

③推古十七年（六〇九年）九月、小野臣妹子等大唐より至る。

④推古二二年（六一四年）六月、遣犬上君御田鍬・矢田部造闕名を大唐に遣す。

⑤推古二三年（六一五年）九月、犬上君御田鍬・矢田部造、大唐より百済の使いと帰国。

⑥推古三一年（六二三年）七月、新羅使に伴い唐より福因・恵日帰国。

⑦舒明二年（六三〇年）八月、大仁犬上君三田耜・大仁薬師恵日を大唐に遣す。

⑧舒明　四年（六三二年）八月、大唐高表仁を遣し對馬に泊る。三田耜・僧旻も帰国。十月、唐国使人高表仁ら難波津に泊る。船三二艘で江口に迎える。

⑨舒明　五年（六三三年）正月、大唐の客高表仁等帰国。

そして、①②③の記事、④⑤の記事、⑦⑧⑨の記事がそれぞれセットとなっていること、⑦⑧⑨記事の年数は信用できること、④⑤の記事は⑦⑧の記事の重複であり、⑥の記事は⑦の記事の後に続くべきものであることを明らかにしています。私はこの服部氏の考察は正しいと考えます。しかし服部氏は④⑤⑥のずれと①②③のずれが同期しているものと考え、日本書紀の①～⑥全体が十四年ずれているという仮説を立てていますが、本来①②③のずれの推定と④⑤⑥のずれの推定は別の理由によって生じているものです。①②③のずれは、前回述べた、裴世清の称号問題と「宝命」問題を理由にしており、裴世清の称号が「仮官」の称号であり、「宝命」という言葉を含んだ国書が「『倭国の阿毎多利思北弧への奏上』の潤色」であるという別の理由で説明がつくのであれば十四年遡及説を持ち出さなくても、推古紀④⑤⑥のずれは舒明紀の記述の重複ということで説明がつくと思われます。

前回述べたように、「鴻臚寺掌客」が「文林郎裴世清」の遣倭国使での仮官であったという石氏の仮説によって生じた「遣倭国使の派遣は隋書に記された大業四年の裴世清一行と、旧唐書に記された貞観五年の高表仁一行の二回だけであった」というシンプルな解釈は、その部分だけでは前回紹介した正木裕氏の論文の結論と変わらないものです。しかし、正木氏が推古十五年～十七年の遣隋使はヤマトへは来ていないと結論づけているのに対して、私は、阿毎多利思北弧は蘇我馬子であり、裴世清はヤマトに来ていると主張してきました。裴世清が大業四年にヤマトを訪れているということが、石氏の仮説によって少なくとも全面的には否定出来なくなったのではないかと考えます。

古田武彦氏は「古代は輝いていたⅢ」において元興寺丈六仏光背銘の「原資料」のもつ、本来の史料性格（古形）として以下の二点をあげました。

イ．蘇我の系列について「伊奈米―有明子―善徳（仏教者としての名が）と書いてある。『日本書紀』ではこれを「稲目―馬子―蝦夷」と表記している。一種の卑字であろう。これに比すれば、この史料の方が本来の表記、あるいは蘇我側の表記ではあるまいか。

ロ．裴世清の一行中の副使の称号と人名が記せられている。これは、倭国伝にも、推古紀にもない資料だ。何等かの原資料にもとづくものであろう。

従来の古田史学内の考察には、日本書紀を編纂した近畿王朝と滅ぼされた蘇我本宗家を別物として捉える視点が欠けていると思われます。裴世清の称号問題に関する石氏の仮説によって、「裴世清が訪れた先は、九州ではなく蘇我馬子のいたヤマトであった。裴世清が携えていた国書（または奏上の記録）は蘇我氏内に隠され（又は乙巳の変で焼かれ）、後の近畿王朝はそれを発見することが出来なかった。そこで仕方なく、小野氏に残る、蘇我馬子の使者たる小野妹子の隋文帝への奏上記録を改竄することによって日本書紀を編纂した。蘇我氏に残っていた記録は元興寺丈六仏光背銘の『原資料』となった。」という推測が可能になるのではないでしょうか。

遣隋使と遣唐使の遣使の主体が違う事に対して、別の視点から探ってみます。対倭国遣使として選任された大業四年（六〇八）の裴世清と貞観五年（六三一）の唐高表仁の格の違いについてです。

裴世清は、大業四年（六〇八、推古十六年）に倭国に派遣されています。使節団は一行十二人です。池田温氏の「裴世清と高表仁」（「日本歴史二八〇号」一九七一年）によれば、裴氏は唐代に一七名の宰相を生んだ関中の大姓です。裴世

清は、唐武徳元年（六一八）以後主客郎中（従五品上）になり、最後は江州刺史（従四品上）になったとされます。さらに堀井裕之氏の論説「唐朝政権の形成と太宗の氏族政策―金劉若虚撰「裴氏相公家譜之碑」所引の唐裴滔（はいとう）撰『裴氏家譜』を手がかりに―」（二〇一二年）によれば、裴世清は武徳七年（六二四）以前に主客郎中（駕部・主客二郎中）に在任しており、また、江州刺史（従四品上）に貞観二年（六二八）以降に任官されています。四年強の年月を経て一品の昇格を果たしています。裴世清が倭国に派遣された大業四年は江州刺史になる二十年以上前であり、当時二十～三十代であったであろう裴世清の文林郎（大業以降従八品）という官職は妥当なところであったと思われます。

古田史学の従来説で主張されてきた、「唐初（六一八～六二二）に鴻臚寺掌客（正九品）の裴世清が近畿へ派遣された」という仮説では、最長でも六年間に四品の昇格を果たしたことになりかなりの無理があります。このことからも裴世清の「鴻臚寺の掌客」が大業四年倭国遣使時の仮官の称号である可能性が高いと思われます。高表仁は、貞観五年（六三一年、日本書紀では到着した翌年の六三二年・舒明四年）に倭国に派遣されています。前述の池田温氏「裴世清と高表仁」によると、高表仁の名前は、隋書、新旧唐書、通典、唐会要、冊府元亀、資治通鑑、善隣国宝記、と多くの中国史料に出てきます。高表仁は隋朝の著名な元勲・高熲（こうけい）の子で、隋の皇太子の娘と結婚しています。高表仁のだいたいの経歴は高安期墓誌によって知ることができます。

「祖表仁、随大寧公主駙馬都尉、渤海郡開国公、皇朝尚書右丞、鴻臚卿、□、涇、延、穀四州刺史、上柱国、郯（たん）国公、高情張日、爽気横猋（ひょう）、登棘署而馳英、□□□符而走實。」

鴻臚卿の後の□に入る字は旧唐書に記された新州刺史（正四品）にあたる「新」と考えられています。上柱国は勲官の最高・正二品待遇、郯（たん）国公は従一品相当であり、高表仁が第一級の貴族であったことは明らかです。

石暁軍氏は、倭国派遣時の高表仁の職名は旧唐書のとおり新州刺史（正四品）であり、鴻臚卿（従三品）は倭国遣使以前の職名であると考察していますが、私は、鴻臚卿という職名が高安期墓誌以外に記されておらず、又新州刺史と鴻臚卿では官品が逆転することから、鴻臚卿が倭国遣使時の仮官であった可能性があるのではないかと考えています。

「裴世清と高表仁」において、池田温氏は「使者としての裴世清と高表仁を比較すると両者の社会的地位および官品には相当の差があり、後者の方が重要性において一段とまさる点が明瞭となった。」と論じています。私は、使者の格の違いは、隋唐側から見た、大業四年（六〇八）と貞観五年（六三一）の倭国の格付けの違いという視点で論じるべきではないかと考えます。その検証の為に石暁軍氏が調査した隋煬帝期と唐太宗期の各国への遣使の職名（格付け）との比較を取り上げてみます。

隋煬帝期の対外遣使の派遣国と使者の職名（本官で表記）

①西域諸国（安国等）：杜行満・司隷従事（正六）と韋節・侍御史（正七）

②琉球：朱寛・羽騎尉（従九）を二回派遣。

③突厥：最初は長孫晟・武衛将軍（従三）、次は史祥・鴻臚卿（従三）

④倭国：裴世清・文林郎（従八品）と遍光高・尚書祠部主事（従九）

⑤西突厥：最初は崔君肅・司朝謁者（従五）、次は韋節・侍御史（正七）

⑥赤土（マレー半島南部の国）：常駿・屯田主事（従九）と王君政（従九）

⑦百済：席律・尚書起部郎（正四）

⑧新羅：王世儀・（不明）

⑨波斯（ペルシャ）：李昱・雲騎尉（正九）

唐太宗期の対外遣使の派遣国と使者の職名（本官で表記）

①南平獠（なんぺいりょう＝中国嶺南（南部）の部族）：韋叔諧・員外散騎常侍（従四下）と李公洩・員外散騎侍郎（従五下）

②吐谷渾（とよくこん＝チベット系部族）：一回目は康處直・中郎将（正四下）、二回目は趙徳偕・鴻臚丞（従六下）と安附国・左領軍府左郎将（正五上）、三回目は李道明・左驍衛将軍（従三）と慕容寶・右武衛将軍、四回目は唐倹・民部尚書（正三）と馬周・中書舎人（正五上）

③突厥：一回目は蘇世長・天策府学士（？）、二回目は唐倹・鴻臚卿（従三）と安修仁・将軍（？）、三回目は安調遮・雲麾将軍（従三）と韓華・右屯衛郎将（正五上）、四回目は豆盧寛・殿中監（従三）

④薛延陀（せつえんだ＝鉄勒（テュルク）系部族）：一回目は喬師望・遊撃将軍（従五下）、二回目は梁方師・左領軍大将軍（正三）、三回目は唐倹・民部尚書（正三）と執失思力・右領軍大将軍（正三）、四回目は郭嗣本・司農卿（従三）と李孝恭・礼部尚書（正三）、五回目は崔敦禮・兵部侍郎（正四下）

⑤倭国：高表仁・新州刺史（正四品）

⑥西突厥：一回目は劉善因・鴻臚少卿（従四上）、二回目は桑孝彦・中郎将（正四下）と韋弘機・左右冑曹（正八下）、三度目は張大師・左領軍将軍（従三）、四回目は元孝友・（？）、五回目は温無隠・通事舎人（従六上）

⑦黠戛斯（キルギス）：王義玄・（？）

⑧吐蕃（とばん＝チベット）：一回目は馮

徳遐・（？）、二回目は李道宗・礼部尚書（正三）

⑦ 罽賓（けいひん＝ガンダーラ地方にあった国）：何處羅拔・果毅都尉（正六上）

⑧ 高昌（トルファン＝シルクロードにあった国）：李道裕・虞部郎中（従五上）

⑨ 天竺：一回目は梁懐璥・雲騎尉（正九上）、二回目は泥婆羅と共に李儀表・朝散大夫（従五下）、王玄策・（前）融州黄水県令（従七）と魏才・典司門令使（？）、三回目は王玄策・右衛率府長史（従六）と蔣師仁（？）

⑫百済：一回目は鄭文表・祠部郎中（従五上）、二回目は高句麗と共に相里玄奨・司農丞（従六下）

⑬高句麗：単独では一回目陳大徳・職　方郎中（従五上）、二回目は鄧素・大常丞（従五上）と叔達・（道士）（？）、三回目は蔣儼・右屯衛兵曹参軍（正八下）

⑭鉄勒（テュルク）：安永寿・右領軍中郎将（正四下）

⑮廻紇（ウイグル）：崔敦禮・兵部尚書検校鴻臚卿（正三）

対外遣使から、隋煬帝期は対外交流の地域的拡大期であり、唐太宗期は西域諸国との交流を重視していた時期であることがわかります。百済と倭国の格付けを対外遣使によって比較すると、隋煬帝期においては、百済に派遣された席律の職名・尚書起部郎（正四）と裴世清・文林郎（大業以降従八品）との大きな格差が見られます。一方、唐太宗期においては、百済に派遣された鄭文表・祠部郎中（従五上）と高表仁・新州刺史（正四品）との格差が逆転しています。

裴世清と高表仁の格の違いは、おそらく隋煬帝期と唐太宗期の隋唐側からみた倭国の格付けの違いからきたものであると推定出来ます。両時期における倭国の格付けの差の要因はいろいろ考えられますが、隋書が『倭国伝』と記さず、あえて『倭国伝』と記したことを考慮すると、隋煬帝期の遣使先は正規の倭国ではなく、唐太宗期の遣使先は正規の倭国であったという可能性があるのではないでしょうか。

「道をゆく」（31）

成瀬　和之

「熊野街道」（一八）

熊野速玉大社は熊野川が海に注ぐ河口の地に鎮座します。平安時代には熊野本宮大社から「川の参詣道」（熊野川）を経て、上皇や女院、貴族が参拝に訪れました。もともとは五〇〇メートルほど南にある神倉山山腹の巨岩、ゴトビキ岩に天降った熊野の神々を祀ったのが始まりとされます。神倉山の「元宮」に対して、現在地に「新宮」が造られたので、これがのちに町の名前にもなったと言われます。

現在の社殿は、一八八三年に花火が原因で焼失したのち一九五三年に、鎌倉時代の「熊野曼荼羅」に描かれた様子をもとに再建されたものです。第二殿の速玉宮に主祭神の熊野速玉大神を祀りますが、熊野本宮大社と同様に熊野三山の十二柱の神々に参拝できるようになっています。

参道にそびえる樹齢一〇〇〇年の梛（なぎ）の大樹は平重盛のお手植えと伝えられ、神木として天然記念物に指定されています。

時間があれば、「元宮」の神倉神社も訪ねたいです。急峻な手摺のない五三八段の石段を上ると、ゴトビキ岩に着きます。なぜ手摺がないかというと、燃え盛る松明を手に男たちが階段を駆け下る「お燈まつり」があるためです。上り降りには十分な注意が必要です。下りには迂回路を利用するのも良いでしょう。のしかかるような岩がご神体となるゴトビキ岩は一見の価値があります。新宮の街が見渡せる絶景の地でもあります。

熊野速玉大社の門前に文豪の居宅を移した佐藤春夫記念館があります。

佐藤春夫は、古典的な定型・抒情を大切にし、最初の詩集『殉情詩集』は抒情詩の典型として多くの人々に愛読されました。

ためいき

（『殉情詩集』より）

一

紀の国の五月なかばは
椎の木のくらき下かげ
うす濁るながれのほとり
野うばらの花のひとむれ

※野うばら（ノイバラのこと）

人知れず白くさくなり
佇みてものおもふ目に
小さなるなみだもろげの
素直なる花をし見れば
恋人のためいきを聞くここちするかな。

二

柳の芽はやはらかく吐息して
丈高く若き梧桐はうれひたり
杉は暗くして消しがたき憂愁（うれひ）を秘め
椿の葉日の光にはげしくすすり泣く……

三

ふといづこよりともなく君が声す
百合の花の匂ひのごとく君が声す。

（以下略）

佐藤春夫は南方熊楠の伝記をもとにし

た小説「南方熊楠　近代神仙譚」も書いています。

そして、佐藤春夫は熊野川河口の和歌山県新宮市の出身で、初代の名誉市民になりました。その佐藤春夫に大きな影響を与えた大石誠之助に、二〇一七年名誉市民の称号が与えられました。

大石誠之助は、一九一〇年の「大逆事件」で幸徳秋水らとともに刑死したお医者さんです。「大逆事件」は明治天皇の暗殺を企てたというのですが、大半は暗殺計画と無関係で、一部を除いて国家によるでっち上げの性格の強い事件です。二十四名が死刑判決を受け、その内六名が熊野新宮関係者でした。戦後になって元被告や遺族らが再審請求や名誉回復を求めていますが、最高裁判所には一九六七年棄却されたままです。「天皇の名において」裁かれた戦前の誤った裁判が、今日なお正されないで名誉回復がなされないでいることは、日本の民主主義の到達点が「まだまだ」だというバロメーターになっています。

その中で紀伊半島の先端近くの新宮市の決定は注目すべき出来事でした。

「大逆事件の犠牲者を顕彰する会」に参加し、大石誠之助の名誉市民実現に取り組んできた、佐藤春夫記念館の辻本雄一館長は、二〇一八年二月九日付け朝日新聞に寄稿し、次のように書いています。

大石誠之助の名誉市民実現には、二〇一七年が生誕一五〇年という節目の年であったということもある。市議会から条例を改正して推挙がなされ、市長が裁断して決定した。提案議員は誠之助の業績を述べたあとで、遺家族の悲しみにも触れ「私たちは石をもって追いやった側の末裔として幾ばくかの重荷を負っているのです」とも述べた。

伝達授与は、去る一月二四日、一〇七年前の誠之助が無念にも四三歳で命を絶たれた午後二時二三分の黙祷から始まった。そうしてNHKのラジオ番組の録音テープ（一九七二年夏ごろの放送と想定される）が議場に流された。ナレーションの締めくくりはこうである。「新宮の地を故郷とする二人の多情多感な男。佐藤春夫と大石誠之助。一人は人生の成功者として名誉市民の名を贈られ、一人は人生の敗者としていまだに名誉が回復されていない。（中略）もし、ふるさとに心というものがあるならば、その心は大石誠之助の如き郷里のために尽くし人生に失敗したものをこそ温かく迎え入れるものでなくてはならないだろう」――と。擬音の波の音が次第に高くなり、やがて細くなって終結する。式は厳粛ななか、簡潔に執り行われたが、「ふるさとの心」が十分に伝わる温かいものだった。

そして寄稿文の最後は、次のように結ばれています。

今回の名誉市民授与は、大石誠之助や「大逆事件」を忘れないという、忘却の淵から掬い上げる、記憶を再生させることの大切さを後代へ伝えてゆく、その「担保」となりうるものだ。

新宮市の大石誠之助への名誉市民授与という快挙は、不十分な民主主義の現状の中の「一筋の光」だと私も思います。

また、朝日新聞の「天声人語」（二〇一八年一月二二日付）は次のように書いています。

その人、大石誠之助は、米国で学んだ医者であった。「ドクトル大石」の表札を掲げ「毒取るさん」と慕われた。貧しくて治療費が払えない人には、口に出さずとも窓をトントンと三回たたけばいいと教えた。そんな言い伝えに人柄を思う。

日露戦争で非戦論を訴え、人道的立場から公娼に反対した。そんな彼が、親交のあった幸徳秋水や地元の仲間とともに弾圧される。いわれなき共謀の罪だったが、周囲の眼差しは一変した。

「ある日突然、親族まで石もて追われるようになった。そういうことが今後も起きないとは限らない」。市議会で名誉市民の提案をした一人、上田勝之さんは言う。「共謀罪」法、そして改憲への動きが市議たちの背中を押したようだ。（中略）

大石は獄中で詠んだ。

〈わがむくろ　けぶりとなりてはてしなき　かの大空に　かよひゆくかも〉　彼の意志を継ごうとする人たちが、紀伊半島にいる。投げかけられた思いを受け止めたい。

二〇一七年六月に共謀罪法が成立し、改憲への動きが強まる情勢の中で、「天声人語」はこう書いたのでした。

「コラム一　田辺」では、南方熊楠について紹介しましたが、新宮では、佐藤春夫とともに大石誠之助について是非知ってほしいと思って書きました。そうしないと熊野の地の大切な一面を見逃すことになるでしょう。

マルクスから学ぶ（9）

成瀬　和之

ポーランドのオシフェンチウムにある元アウシュビッツ収容所（ナチスによってオシフェンチウムからドイツ語のアウシュビッツに変更された）の正門には「働けば自由になる」というプレートが掲げられています。「真っ赤な嘘」でした。入り口から入れば強制労働、そしてガス室が待っていました。

その「ナチスに学べばいい」と言い放った麻生副総理が岸田政権の下で、再び自民党の副総理に居座りました。

岸田首相が看板とする「新しい資本主義」を創る「議員連盟」発足にあたり両脇を固めたのが安倍・麻生・甘利の「3A」なのですから、アベノミクス・新自由主義からの転換など期待できません。

新自由主義の経済・社会政策は約四〇年続いていますが、国際的には南北問題、先進資本主義国内部での格差の拡大、地球規模での環境破壊などの問題が山積し、多くの資本主義国は資本主義の矛盾を再び激化させています。最近では、コロナ禍をはじめとして繰り返される感染症、気候変動・地球温暖化が進み、経済成長至上主義からの脱却が求められています。さらには、資本主義というシステムそのものが問い直されているのが「現代」です。

新自由主義の経済を根本的に理解しようと思えば、そもそも「逆立ち経済」の根源となる「資本主義経済とは何か？」を問わねばなりません。

経済学は科学です。科学とはまずもって、人間による客観的諸法則の体系的な認識です。

人間がその生活の中で自然や社会を意識的に変革することができるのは、そのような諸法則の体系を認識することによってです。法則とは、諸事象のあいだの内的な一般的な必然的関連です。私たちの感覚にとらえられているのは、法則のあらわれ、つまり現象です。科学は現象の奥に潜んでいる本質あるいは法則をつかみ出します。

しかし、現象の背後にある本質あるいは法則は、しばしばまったく逆のかたちで現れます。認識された法則は、しばしば出発点での諸現象とはまったく違ったかたちをとっています。私たちの目には、太陽が地球の周りをまわっているように見えます（現象）。しかし、科学は、地球が太陽の周りをまわっている（本質）ことをつかみ出し、そのように説明します。

だから科学とは、諸現象から諸法則を体系的につかみ出し、そのうえで、その諸法則から諸現象を展開＝説明する、という認識です。「現象から本質へ」、そしてそれから、「本質から現象へ」、という二つの歩みは、科学が客観的現実を把握するためにたどらなければならない過程です。

K・マルクスの『資本論』は、この科学の「研究の仕方」と「叙述の仕方」に基づいているのです。『資本論』から出発して、商品、貨幣、資本、金融、財政、世界経済とこれから考えていきましょう。

俳句

土田　裕

熟れ時の柿を逃さぬ鳥の影
虫の音を楽とし浸かる仕舞風呂
長き夜や救急処置を待つ廊下
コロナ禍や独り味わう新走り
朝寒や手をポケットにポストまで

影山　武司

枝豆の絵手紙に描く産毛かな
天高し托鉢の袈裟翻り
番犬はまだ子犬なり青蜜柑
蹲の水に鎮もる今日の月
斑鳩の風の揺らせる鳴子かな
螻蛄鳴くを独り夕餉の伴として
鳩時計に独り言ちたる夜長かな
オーボエの音色の潤み秋夕焼
墓碑銘の文字をなぞりて銀杏散る
泣きべそもカメラに収め運動会

編集後記

SK生

▼非常事態宣言が解除されてすでに一ヶ月以上がたち、街には多くの人々が出歩くようになってきた。小生も恐る恐るだが、先日、昨春以来ずっとお預けであった生ビールで友人たちと乾杯をした。ジョッキを飲み干しての感想はただ一言。「うまい！」。五臓六腑に染み渡るとはまさにこのことである。▼古代ギリシアの叙事詩「イリアス」はトロイに攻め寄せた兵士たちが疫病に苦しみ次々と倒れていくギリシア軍の惨状ぶりから始まる。事の起こりはギリシア軍の総大将が神の怒りを買う愚行をなしたことにあるのだが、この疫病によって死んだ兵士を焼く火はひきもきらず燃え続けたという。▼そもそもの話だが、集団で生きようとする人間はウイルスには願ってもない存在である。古来、文明は人間が集まる都市で発展したが、もし、疫病が発生すればあっという間に広がる。それは古代であれ現代であれ変わらない。さらに人間の愚行が重なればこれはもう目も当てられぬ。▼この一年半、我が国でもコロナ禍にある中、愚行は何度か繰り返された。そして、病苦・貧苦から抜け出せぬ人々が多く生み出された。もう、たくさん、うんざりである。▼しかし、である。カミュは小説「ペスト」の末尾で、ペストと闘い続けてきた主人公にこう言わせている。「勝っても負けても何が起こったか認識し、忘れないようにしよう。それが人間の義務だ」と。そうか。ならば、小生も微力ながらこの義務を果たしてコロナ禍が去ったとき、友とともに「うまい！」といえる盃を重ねたい。控え目ではなく、堂々と。

連載 ふみの道草（41）　山椒魚

途方もない虹の立つところ

これは、一九七九年に大阪のＶＡＮ書房から発行された高橋徹詩集のタイトルである。その最初に次の詩が掲げられている。

序章

両手ですくう。
指をひろげると
水のようにこぼれ落ちる。
最後のひとつぶをつまもうと試みる。
が　なんとしても　つまめない。

つまめない微細な
ひとつぶひとつぶの堆積した
砂の巨大さに
私は呼吸を忘れた。

×　×

野生モウコヤギの角がころがっている。
わずかに残った顔骨から
にょきり左右に突き出て
長さ二メートルはあろう。
オオカミにはらわたを奪われ
キツネに肉を盗まれ
ワシやタカにせせられ
シデムシやエンマムシにしゃぶられ
なお固い部分にカツオブシムシが
食いこんだ。
奇妙につややかな角をなでさする。
それは銃身さながらに冷たかった。

×　×

ここにもヒキガエルが生息しているという。
そいつは火のような砂にまみれて
はいずり
昆虫類を捕食する。
早春　寒天質紐状の卵塊をうむ。
いったいそいつは
無辺際のなかの　針の尖端の一点
ともいうべき
水たまりの存在をどのようにして
知るのか。

眼前はるか彎曲した地平線に
ラクダの群れに似た蜃気楼がゆれる。

×　×

その人はしゃがみこんだままだ。
そしてついに叫んだ。
「キミ　指イッポンノ深サデ　砂ハ
シメリケヲ帯ビテイル。ゴ覧　マズシイ
草ニ　虫ガ　ヒソンデイル。ホラッ
コレハ　テントウムシミタイ。
ホッ　バッタニ似タノモイル。
ソシテ砂ヲカキワケルト　ナンノ
幼虫
ダロウ？　コンナ　ウジムシ　ソック
リナノモ。……　ココハ　ナマナ
マシイ
生命ノ世界ナンダゼ」

天と地がゆらゆらゆれて
まじりあうあたり
にわかに曇り
とほうもない虹が
猛烈なスピードで
私たちのほうへのびてくる。

途方もない虹の立つところ―ここはゴビの砂漠である。なるほど、詩集の表紙をめくると、『ゴビにも花が高橋　徹』のサインがある。

一風変わった詩であるが、詩人の「後記」を読んでなるほどと思った。詩人は、当時、朝日新聞の大阪・学芸部記者であった。

『私は情緒たっぷりなのは好まない。「定理」のような文体をよしとする。本詩集の作品もそのように願いつつ書いた。多くは理想からほど遠いといわねばならないが。

一切の飾りを捨て骨だけの文体を、というのはあるいは私の職業のせいかもしれない。主観・客観の根本的な差異はあるが、すべての贅肉をそぎ落とした仲間の新聞文章のある部分に、私は時に詩人の詩よりも遥かに詩を感じる。私にとって詩は特殊なものではなく、日常そのものである証左といえるのか』

骨のない叙情ばかりがいやになり
そんな詩人がいたことに驚くとともに
にほっとした。